



あそびの屋台

あそびの屋台実行委員長 大久保 潤

昨年、Web 開催となった「全国児童館 児童クラブ宮城大会」は、様々な壁や課題を乗り越えて見事大成功となりました。しかし、まだやり残した事が…。

大会のフィナーレで私達は全国の皆さんに大切な約束をしました。「宮城で、あそびの屋台を必ずやります！その時は皆で実際に会いましょうね！宮城で待っています。」と。

あそびの屋台とは、全国大会が行われた後、大会参加者が大きな会場に集まり、開催地域の児童館や児童クラブで行われているあそびを紹介し、体験し、参加者同士が交流をはかる場です。そこには地元の子供達も参加し、まるで大きな大きな児童館ができあがるような大事なイベントなのです。しかし、宮城大会は新型コロナウイルスの影響でWeb 開催となってしまい、あそびの屋台は開催できませんでした。大会の準備中も、頭の片隅にはあそびの屋台の事がちらつきました。だって、全国大会の醍醐味と言っても過言ではないから…。

そんな中「大会と同日開催じゃなくてもいいのでは？コロナと上手く付き合えるようになったら、別開催でもできるんじゃないかな？」という声があがりました。「なるほど！それならいける！」急にあそびの屋台開催への道が開けた思いでした。（あの約束を、全国の皆さんと画面越しにしたのですから。）

あれから1年。今でも、相変わらず新型コロナウイルスは猛威を奮っています。ただ、私達はコロナに対抗すべく「感染症対策」という、ここ数年で培った経験と知恵が集まった対応方を作り上げてきました。100%完璧とはいかないでしょうが、「コロナ禍だから中止、諦めよう」という時期は過ぎ去り、「コロナ禍でも出来ることをやろう！」へとシフトチェンジできるようになったと感じます。世の中の常識や意識が変わる中、全国大会の元スタッフは、静かに今か今かと「あそびの屋台」開催を待ち侘びていました。

そして今年の9月、念願の開催へ向けた実行委員会が発足したのです。全国大会から1年という長い時間がたっても、その熱量と想いは消えることはありませんでした。

宮城県内から21名の有志が集まり、全国大会と同じ「こどもがまんなか」というスローガンを掲げ、勢いよく船出しました。第一回実行委員全体会では「大人が楽しまなきゃ、子どもも楽しくないよね。私達がまず楽しい事を考えよう！」「障害や年齢の壁を越えた、すべての子ども達が喜べるものをやりたい！」「仙台の児童館は乳幼児も利用できる。だから小学生以上の子ども達だけでなく、乳幼児も一緒に楽しめるものを！」「子どもの参画にもフォーカスしよう」「大人の本気の遊び心を見せたい」「コロナ禍で我慢ばかりの子ども達に『楽しい』を還元したい。」などなど白熱した議論が展開しました。「こどもがまんなか」というより、同じ目線に立って「こどもとまんなか」といったような楽しい感覚を忘れていない大人達。現在は三回の実行委員全体会を行い、中身がだんだんと見えてきました。全国大会の経験を活かして、新しい物を作っている私達の心の中はドキドキとワクワクでいっぱいです。（まるで子どもみたい。笑）

あそびの屋台本番は2023年の7月を予定しています。ここからきっと大きな壁や課題が出てくるでしょうが、不安はありません。全国大会の時と同じように皆で乗り越えていけるという自信があります。

私達、いわゆる若い世代が今一度手を取り合って全国の皆さんとした約束を果たしていく姿を見守っていただきたいです。2023年の7月に是非お会いしましょう。その時は一緒に子ども達とまんなか立ちましょね。

